

2005年12月18日 待降節第4主日礼拝

『苦難のしもべ、大祭司イエス』

(イザヤ 53 章 1~5 節、ヘブライ 4 章 14~16 節)

アドベントとは、イエスの誕生の前祝いというだけではありません。巷では、クリスマスシーズンはイブ迄で終り、前祝いだけのような扱いですが…。わたしたち教会は、クリスマスを前祝いだけで終わらせることはしません。もし、イエスがお生まれくださらなければ何の意味もありません。それにアドベントは、主イエスが再び来られる日を待ち望むことです。主イエスの再び来られたとき、全ての人間は神の前に引き出されます。主の再臨は、わたしたちにとって地上の人生の総決算する日でもあります。「神の御前では、隠れた被造物は一つもなく、すべてのものが神の目には裸であり、さらけ出されているのです。この神に対して、わたしたちは自分のことを申し述べねばなりません」(13 節)。キリストを信じて生きた人も、信じなかった人も、信じてる振りをしてきた人も皆、神の前での総決算を逃れることは出来ません。わたしたちは、いまま自分で気づくと気づかないにかかわらず悪を積み重ねています。このようなわたしおとしたちが、自分の正しさを神に訴えても役にはたちません。神の目を欺くことは出来ません。神の審判にさらされたら、わたしたちはひとたまりもありません。

それでも、わたしたちは確信を持っています。イエス・キリストがわたしたちに与えられているということ。それがわたしたちの確信です。主イエスは、諸々の天を通過されたわたしたちの偉大な大祭司です。主イエスは、わたしたちの弱さに同情できないような方ではありません。わたしたちは、様々な弱さを抱えています。肉体の弱さもあります。体の弱さだけでなく、道徳的な弱さもあります。自分が行ないたいと思う善を行なうことが出来ず、返って望まない悪を行なってしまふ。しかもそれを止められない。そんな弱さを誰もが抱えています。自分自身が弱いのに、他の人の弱さに同情も出来ない。それどころか、他人の弱さや失敗につけ込んで陥れようとしたり。他人の弱いところをあげつらい非難ばかりしています。それがわたしたちの生きている世界です。だからわたしたちは、自分の弱さを他人に気づかれないように必死で隠しています。

わたしたちの大祭司イエスの偉大さは、わたしたちの弱さに、同情出来るということですから。主イエスは、世が造られる前からおられた神の独り子です。この方が、来られたのは何の為でしょうか。わたしたちと同じ弱さを背負うためです。そのために、主イエスは、「わたしたちと同じ肉体をもった人間として乙女マリアから生まれてきました。イエス様が誕生された事の次第は皆よく知っている通りです。イエスの母マリアは、婚約中に許嫁のヨセフと一緒にいる前に聖霊によってイエスを身ごもりました。ヨセフは、密かに離縁を決心していたのです。しかし、神の御使いからマリアのお腹にいる子は聖霊によって宿っていると聞かされて決心を変えてマリアを妻に迎えました。こうしてイエスは、マリアとヨセフの子として生まれ育ったのです。イエスの幼少時代について聖書は余り多くのこと

を書いてありません。イエスは、父親が誰なのか分らないと後ろ指さされてもおかしくない境遇に生まれ育ちました（マルコ 6 章 3）。

わたしたちの大祭司イエスは、わたしたちが苦しんでいる時に遠くに立って眺めている方ではありません。イエスは、わたしたちと同じ弱さをもった人間として地上の日々を送ったのです。わたしたちの人生にも誘惑や試練があるように。イエスも、様々な場面で試みにあいました。公の生涯の始めるにあたって、荒野で試みを受けられたのもその一つです。イエスは、四十間荒野にいてサタンから試みを受けました。荒野で、四十日断食した後ですから空腹も絶頂に達していました。サタンは、イエスの肉体の弱みにつけ込んでいいました。神の子なら石をパンに変えてみると。また、神殿に屋根の端に立たせて神の子なら飛び降りて見よ、と。悪魔は、あなたの神、主を試してはならないという戒めを破らせようとしたのです。また、世の全ての国々の繁栄をみせて、「もしわたしを拝むなら、これをみんな与えよう」といって誘惑しました。サタンは、イエスの空腹につけ込み、自分が神に愛されているかどうかの確信をゆるがせにし、この世の権力をちらつかせてイエスの気持ちを揺さぶろうとしたのです。イエスは、自分がやがて苦難を受けると苦難を受けると弟子たちに告げました。全ての人から排斥されて十字架に付けられることになっていると。その言葉を聞いて、弟子は驚愕します。ペトロは、イエスを脇へ寄せて言いました。「主よ、とんでもないことです。そんなことはあってはなりません」（マタイ 16 章 22）。そんなことはあってはならないと、ペトロはイエスの使命を放棄させようとした。ペトロの口を通してサタンが語ったのです。ペトロも他の弟子も皆、十字架を恥とし考えていたのです。だからこそイエスは、厳しく言われたのです。「サタンよ引き下がれ」と。イエスが受けた最後の試みは十字架でした。人々は十字架に掛かったイエスに向かって口々にいいました。「神の子なら、十字架を降りて自分を救って見ろ。そうすれば信じてやろう」と。主は、わたしたちと同じようにあらゆる天に於いて苦しめられました。わたしたちにとって一番苦しいことは、死の苦しみです。寿命が尽きて死ぬことも苦しいことです。イエスは、まだ若い命を取られたのです。しかも、何の罪も犯していないのに、見せしめのように人々の前で磔にされたのです。人々は、思っていました。多くの人を救ってきたイエスもやはり、何か悪いことをしたのかと。命を取られる苦しさ人と捨てられ、罵倒される苦しみ。それが、主イエスの上に一度に振りかかったのです。主が担ったのはわたしたちの罪です。無実のイエスを苦しめたわたしたちこそ神の怒りを受けるべきでした。仮にわたしたち自身が罰を受けても、自分の罪を帳消しにする力はありません。そんなわたしたちの為に主は来てくださったのです。わたしたちの為に、イエスさまは、犯罪人の一人に数えられて死んだのです。主イエスは、わたしたちの為に執り成す大祭司として、御自身を罪を償う供え物とされたのです。イエスは、人間としては、罪とは縁のない正しい人、まことの人です。このイエスは、世の造られる前からおられた、まことの神でもあられます。このような方だけが、わたしたちを罪から救い出すことができます。神の子イエスが、地上に来られて人とされた。御子は、永遠の救いを勝ち取ってわたしたち

に与えるためにこられたのです。

イエスは、自らを捧げて、諸々の天を通過して父の御許に行かれたのです。アダムが罪を犯してから、わたしたちは神様が自分を罰する為におられるかのように思って来ました。アダムが神様の足音を聞いて恐怖を感じて隠れたように。わたしたちの内にも神様から逃れたい気持ちがどこかにあります。わたしたちが一方的に神に背いたのに、わたしたちはいつも神に背を向けてきました。わたしたちの方が、神様に対してわだかまりを持って北のです。しかし、神様は意固地なわたしたちに駆け寄ってくださったのです。御子イエスを与えるほどに神はわたしたちを愛されているのです。神の遣わしたイエスが、わたしたちに先立って、父の許へいかれた。天の父の右にわたしたちの大祭司イエスがおられて取りなしてくださっています。これを、信じるから罪人の、わたしたちも父である神の前で居ることが出来るのです。イエスが、息を引き取られたとき、神殿の至聖所のたれ幕が上から下に真っ二つに裂けました。それは、神がわたしたちのわだかまりを解いてくださったしるしです。ですから、わたしたちは、かつてのアダムのように神の前でふるえおののく必要はありません。神は、罪人を憐れむ方です。惜しみなく恵みを与える方です。主イエスによって、わたしたちは神の愛を知ったのです。天の父は、恵み深い方であると。神は、恵みによってわたしたちを養う方です。ですから神のついでに王座は恵みの座です。主イエスのゆえに、わたしたちは神を恵み深い父と呼ぶのです。イエスは主であると信じるなら、イエスはいつも味方になってくださいます。イエスに於いて、大胆に恵みの座に近づきましょう。信仰とは、主イエスのゆえに信頼をもって、神に近づくことです。

[説教者：堀地敦子牧師]